千鳥

鈴木三重吉

千鳥の話はの娘のお長で始まる。小春の日の夕方、蒼ざめたお長は軒下へを敷いてしょんぼりと坐っている。干し列べたには、もはや糸筋ほどの日影もささぬ。洋服で丘をってきたのは自分である。お長は例の泣きだしそうな目もとで自分を仰ぐ。親指と小指と、そしてがけのは初やがこと。その三人ともみんな留守だと手を振る。で奥をして手枕をするのは何のことか解らない。でたばねた髪のれは、かき上げてもすぐまた顔に垂れ下る。
　座敷へ上っても、誰も出てくるものがないからがない。廊下へ出て、のこのこ離れの方へ行ってみる。の家で方々に白木綿を織るのがが鳴くように聞える。廊下には草花のが女帯ほどの幅で長く続いている。二三種の花が咲いている。水仙の一と株に花床が尽きて、低い階段を拾うと、そこが六畳の中二階である。自分が記念に置いて往った絵が、そのままにく壁に懸っている。これが目につくと、久しぶりで自分のに帰ってきでもしたようにしくなる。床の上に、小さな花瓶にの花が四五本挿してある。夏二た月のの間、自分はこの花瓶に入り替りしおらしい花を絶やしたことがなかった。床の横の押入から、赤いの帯上げのようなものが少しばかりみだしている。ちょっと引っ張ってみるとすうと出る。どこまで出るかと続けて引っ張るとすらすらとすっかり出る。

－20－